

煌

一〇〇〇



田村泰次

蝗

(いなご)



田村泰次郎

新潮社版

昭和四十年十月二十日印刷
昭和四十年十月二十五日発行

定価 四二〇円

著 者 © 田村泰次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京 〇一一一(大代)
振替東京 八〇八番

印刷・塚田印刷株式会社 製本・神田加藤製本所

乱丁・落丁本はお取替え致します。 Printed in Japan 1965

蝗	5
地雷原	63
山上陣地	99
將軍	131
黃塵に消える	157
黃土の人	183
裸女のいる隊列	203
わかもの	217
後書	238

見
返
し

原
精
一
画

蝗

(いなご)

蝗

ツチも草木モ 火トモエル

ハテナキ曠野 フミワケテ

ススム日ノ丸 鉄カブト

.....

その歌をいつもうたい馴れているので、
私たちの合唱の歌声にあわせて口ずさみながら、
原田軍曹は歌の文句を思い浮かべていたが、
ほんとうをいえば、私たちの歌声は列車の走る轟音

とまじり、ただの喚声でしかなかった。鉄板の戸の棧にひっかかっているカンテラが、車輛の振動につれてゆれ、そのカンテラのまわりのあかるい部分もゆれていた。鉄板にかこまれた長方体の空間のなかで、あかるい部分は、そこだけであった。そこから、女たちの歌声が、さっきから何度もくり返されていた。あとの部分は、ほとんどもののけじめもつかない暗さで、その暗さのなかに、原田軍曹と、能見山上等兵と、平井一等兵とが横たわっていた。

歌声はもう長いあいだ、つづいている。それはまるでうたいやめることを忘れたように、次第に熱がこもり、たかまって行く。原田軍曹は寝返りを打った。女たちの姿が、光りのなかに浮きあがっているが、原田にはそれは見えなくて、彼の眼に見えるのは、うしろの鉄板の壁に映っている彼女たちの影だけである。レールの継ぎ目に列車がかかり、がたとカンテラがゆれると、そのたびに、その影もひきつるようにのびちぢみする。

女たちと、兵隊たちの距離は、三メートルとはなれていない。この車輛の三分の二以上の空間は、底の面積五〇平方センチ、高さ七〇センチほどの、数えきれぬ白木の空箱の梱包が占めている。実際は、数えきれないことはなかった。原田は、それらの空き箱を、原駐地の石太線檣^{ゆじ}次の、兵団司令部出入りの御用商人から、ちゃんと員数をあたって、受領してきたのである。この車輛の前の車輛にも、うしろの車輛にも、天井までとどぐぐらいに、白木の空箱は積みこまれていた。これらの白木の空箱を宰領して、黄河を渡り、洛陽をめざして、そこに近い、河南の平野のどこかにいる兵団司令部まで送りとどけるのが、原田軍曹の役目であった。彼は

半月前、ここを一度、兵团司令部と一しょにすすんだ。戦死者は、あらかじめ用意した白木の箱だけでは、到底、おっつかないほど、作戦の進行とともにふえるばかりであった。いそいで、白木の箱を補給するために、彼は原駐地へ派遣され、いまはその帰途にあった。彼の任務は、実はそれだけではなかった。この車輛のなかで、夜ふけだというのに、狂ったように声はりあげて歌っている五人の女たちを、原駐地からそこへつれて行くのも、彼の別の任務にちがいなかった。そのほかに、もう一人の男が同行していた。女たちの抱え主で、朝鮮人の金正順である。前線の兵隊たちの欲望を満たさせるために、自分の抱えの女たちを、そこへつれて行くという、りっぱな名目の裏で、憲兵隊の眼の光らない場所で、阿片を売買しようとするのが、この男の目的であった。

列車はよほど南下したらしく、むうっとする車内の熱気は、息苦しいほどになった。女たちはみんな、腕をまくり、スカートをまくって、同じ歌をいつまでもうたっている。ぶよぶよした太腿をつつむ青白い皮膚が、汗でべっとりと濡れて光っている。それまで横になっていた原田は熱さに耐えられなくて、上体を起した。二本の軟体の肉塊が正面にあり、その肉塊のあいだには、どこまでもはいつて行けそうに思える、奥深い暗部があるのを、原田は見た。その暗い暗部の上には、原田の知りすぎている女である、ヒロ子の顔があった。櫛次にいるとき、原田はすくなくとも十回以上、彼女のもとにかよった。街のその一廓にいる女たちのなかで、ヒロ子は一番気立てがよく、兵隊たちに親切であった。兵隊たちにとっては顔は、二の次である

が、その顔にも、ヒロ子は、女たちのなかでは、とりわけ、男好きのするものがある上に、荒稼ぎの稼業に似ず、皮膚がなめらかで、すきとおるほど青白かった。

ヒロ子は朋輩たちと同じように、一ぱいに口をひらき、上体を左右にゆすって、そのことに陶醉しきっているようにうたっている。原田は彼女の下腹部の底知れないように思える暗部をみつめていた。その内部は、どういう具合になっているか、なにがあり、どれほどの湿潤と温かさがそこにあるか、彼は知りすぎるほど知っていた。そこには、なんにもないのだ。強いていえばなんにもないということを感じさせられる、なにかがあるのだ。いつも彼がはいって行くと、すぐに火のような疼きが背筋をつきぬけて走り、ときには頭が痺れてしまうことさえあるが、その一瞬後は、心がからっぽになり、寒々しい風が吹きぬけ、いつもそこにはなんにもなかったことを、いやというほど感じさせられる。口のなかには砂のようなものがたまり、自分が生きているのか、死んでいるのかさえわからない、味気ない気持に陥る。だが、その味気ない気持は、原田にとって、明日、死ぬかも知れない自分を、一層、平気で死の世界に近づかせるための一歩前進である。その意味で、自分が生きているのか、死んでいるのかわからない世界にはいることの出来る眼の前にある、そのものは、彼が兵隊であるかぎり、まちがいない、必要であった。

原田の必要なものが、三メートルの距離をおいて、二本の太い肉塊にはさまれて、そこにある。この熱気のこもった息苦しい暗がりのなかのいまも、それは必要であることを、彼は自分

の身体で感じた。列車は作戦地帯にはいつている。いつなんどき、どんなふうに、自分に死が訪れるかわからない運命に、自分がおかれていると思うと、彼は熱っぽい凝視を、その暗部からはなせなかった。死の恐怖をおしのけ、死と仲よくするために、のめりこむようにその暗部へめぐりこみたかった。

.....

弾丸モタンクモ、シューケンモ

シバシ、露営ノクサマクラ

.....

汽笛も聞えないで、突然、がたん、がたん、と、二、三回、大きな振動があつて、列車が急停車したようだ。聞き馴れぬ人声がはなれたところに、聞えた。しばらくすると、原田たちがいる車輛のすぐそばで、大きな叫び声がした。

「おーい、女たち、降りろ、——どこにいるのか。出てこいっ」

酒に酔っているらしい、どこか舌のもつれた、だみ声である。女たちはうたうことをやめた。そして、お互いに顔を見あわせ、無言のまま、軽蔑するような嘲笑で、安口紅をぬりたてた、乾いた唇をひきつらせた。原田は、「またか」とひくくつぶやいた。そばに眠っている、能見山上等兵も、平井一等兵も、眼をあげたようである。

「班長」

「いいから、寝てろ」

原田はゆっくりと身体を起し、閉まっている戸の内側へ近づいた。能見山上等兵も起きだしてきた。

「平井、お前は、そのままでおれや」

平井一等兵は、胸部疾患で一年近くも北京の陸軍病院にいて、原隊へ復帰してきたばかりであった。榆次に帰ったが、自分の部隊が作戦に出て、しかも、そのあとには別の部隊が駐屯しているのを、兵站宿舎でどうしたらいいか、わからないでいるのを、原田がみつめて、勝手につれてきたのである。補充兵だが、見た眼は、胸の悪かった男らしくもなく、血色がよく、ぶくぶくと頬つべたも肥っていた。

「こらーっ、出てこいったら、出てこんか。チョーセン・ピーめ」

機嫌を悪くした猛獣が檻のなかで、身体ごと自分を檻にぶつつけるような、どすんどすんという、重々しいひびきが、鉄の車輛につたわった。

「おい、灯を消せっ」

女たちが立ちあがってカンテラの灯を消すのを見定めてから、原田は戸の錠に手をかけた。そういうあいだも、相手の怒号と、戸にぶつつかるものものしいひびきはやまなかった。原田は力を入れて、鉄の戸をあけた。むうっとする乾いた熱風が、彼の頬を搏った。そのとたん、原田は思わず、自分の頬を両手でおおった。とっさに彼は、それを風のなかにまじる数知れぬ砂

の粒だと直感したが、それにしてはちょっとちがう感覚である。砂の粒もまじってはいるが、それだけではない。砂の粒よりは、何倍か、何十倍も大きな固体のようだ。闇のなかに、熱風はひゅう、ひゅうと凄まじい咆哮をあげて吹きまくり、なにがぶつつかるのか、絶えまのない衝撃で、原田の頬はゆがんだ。

「貴様が、引率者か。チョーセン・ピーたちを、すぐ降ろせつ。おれは、ここの高射砲の隊長だ。降りろ」

そとの闇の砂地に、両肢をひろげ、ふんばるようにしてつつ立っている男の怒号は、熱風の咆哮をひき裂くように、殺氣がこもっていた。黒い男の影のまわりに、尚いくつかの男の影があった。原田は返辞をしなかった。ここが高射砲陣地帯であるからには、すでに黄河の南岸に達しているのにちがいない。何故なら、それまで日本軍のまったくいなかった黄河の北岸の中原地帯へ攻めこみ、京漢線打通を目的とした、こんどの作戦のために黄河に架せられた仮橋を敵の爆撃から護ろうとして、両岸におびただしい高射砲陣地が布かれていることを、原田は知っていたからだ。アメリカ軍の海上封鎖によって、仏印方面への補給路を断たれた日本軍は、大陸の奥地をとる補給路をひらこうとして、約一箇月前から苦しまぎれに強引な作戦を展開していた。

原田は地面にとび降りた。足の裏のやわらかい粘着力のある砂地の感覚は、そこが黄河の流域であることを示していた。

「自分たちは、石部隊の者です。この車輛のなかには、前線にいる自分たちの部隊へ輸送する遺骨箱が載っているだけです」

風の唸り声に、原田の声はかすれて吹きちぎれた。

「嘘をいうな。前から八輦目の車輛のなかには、五名のチョーセン・ビーが乗っていることはわかってるんだ。新郷から無線連絡があつたんだ。命令だ。女たちを降ろせといったら、降ろせ」

酔っぱらい特有の、テンポの狂ったねちっこい語調で、そう叫びながら、将校は腰から、刀を抜いた。刀身は、腐りかけた魚腹のように、きらりと鈍く光った。

「女たちは、石部隊専用の者たちです」

「なにっ。文句をいうな。なにも、減るもんじゃあるまいし、ケチケチするな。新郷でも、さんざん、大盤振舞いをしたそうじゃないか。何故、おれのところだけ、それをいけないというのか」

「しかし、——」

「しかしも、くそもない。いやなら、ここをとおさないだけで。絶対に、さきへ行かさない。いいか。わかったな。通行税だ。気持よく払って行け」

ここへくるまでに、開封を出発してまもなく、新郷と、もう一箇所、すでに二回も、彼女たちは、ひきずり降されていた。そのたびに、その地点に駐留している兵隊たちが、つぎつぎと